

コロナ禍と疱瘡神塔について

長期化するコロナ禍は、一向に収束する気配が見えない。コロナという疫病に対して、我々は外出の自粛や「うがい・手洗い・三密を避ける」ことくらいの行動しか出来ないのかと思う。ましてや医療技術が未発達であった昔の人々は、疫病が発生するとなす術もなくただ祈ったのであろう。そして「疱瘡神塔」を建立して疫病が村に入らないよう、あるいは、罹っても病状が軽くなるように祈ったのかもしれない。

第1 流山市内の疱瘡神塔

市内の疱瘡神塔は、「流山の石仏」の資料によれば13ヶ所であり、流山の疱瘡神（一色勝正）では11ヶ所と、まちまちである。そして実際に調査すると4ヶ所が確認出来なかったため、現在は計9ヶ所である。形態は「疱瘡神」と書かれた文字塔がほとんどであるが、流山で唯一の「妙正大明神」は、マンション建設のため紛失しているのは非常に残念である。設置場所は、神社6ヶ所、寺1ヶ所、路傍1ヶ所となっている。「疱瘡神」の建立理由から、本来は路傍に設置されるのが妥当と思われる。しかし、多くの石塔類は、明治初期の廃仏毀釈やその時代時代における道路拡張や区画整理などにより、一ヶ所に集められたり、撤去されたりすることがある。

1 疱瘡神 明和四年六月吉日（1767）（人名1）

駒 93 大宮神社

- * 大宮神社は元々旧加村の総鎮守である。創建は不明だが、境内の大杉神社が1607年とあることから、それ以前と思われる。水運で栄えた流山で、市内最古（明和4年）の疱瘡神である。



また、境内には年紀不明のもう一つの疱瘡神塔がある。

疱瘡神 駒 48 平和台・大宮神社

2 妙正大明神 寛政十午二月上八日（1798）（人名2） 駒 44 十太夫 185

- * 妙正大明神とは、日蓮宗系の疱瘡神として、妙正（明正、妙照）大明神と刻まれる。
- * 現地確認するも、十太夫の地名は残っているが、当該番地はマンションになっている

ため確認できず。



3 疱瘡神 文化十一甲戌年正月吉日（1814）

小金領桐ヶ谷南村 笠付 67 神明神社

* 神明神社の祭神は、誉田別命、天照皇大神、天児屋根命の三神である。境内には多くの石塔類がある。特に、文化11年（1814）の疱瘡塔があり、疱瘡の神の心をしずめ少しでも早く去ってもらうために建てたとされる。

4 疱瘡神 文化十二乙亥年二月朔日（1815）

当村子供中世話人（人名1） 笠付 92

向小金新田・香取神社

* 造立者が「子供中世話人」とあることから、子供が罹患しないよう祈願したとされる。



5 疱瘡神 文化十三丙子年正月吉日（1816） 惣村中
世話人（人名5） 駒 61 西深井 107

* 今にも倒れそうで無惨な恰好をしているが、市内で唯一路傍に設置されているものである。

6 疱瘡神 文政五壬午二月吉日（1822） 東深井村中

願主 角柱 61 東深井・慈眼院

* 東深井山田家の氏寺。山田家に残る古文書から、当家の祖先は石田三成の重臣山田上野之助で、佐和山落城後、倅と孫が逃れ東深井に住んだという。



7 疱瘡神 文政九戌二月吉日（1826）（人名1） 駒 42 鱒ヶ崎・雷神社（六社神社）

* 浅間神社や猿田彦などの石碑はあるが、疱瘡神は確認できず。



8 疱瘡神 天保六未正月吉日（1835） 駒 41 木・香取神社

* 庚申塔等の石碑はあるが、疱瘡神は確認できず。

ただ、大杵大明神（文政十亥六月吉日・笠付・87）があるので、疱瘡神塔と同一視しているのか。

9 疱瘡神 天保十四卯年四月吉日（1843） 野々下長崎連中
セハ人（人名1） 駒 61 長崎・天形星神社

* わがまち・ふるさと再発見＝～中国の道教では木星のことを天形星といい、疫病を払う星（神）として信仰されていました。奈良国立博物館に国宝の辟邪絵（へきじゃえ）がありますが、その一つに「牛頭天王をつかんで食べる天刑星」があります。絵は神の姿の天刑星が、牛頭天王を食べているところが描かれています。～牛頭天王は、インドの悪神で疫病を流行らす神でしたが、仏教に入って祇園精舎の守り神となりました。日本でも祇園社や天王社、天形星神社の祭神となりました。悪神や崇りを恐れる存在を、神に祀るのは信仰の一つの姿でした。しかし、明治政府の国家神道推進にあたって、「テンノウ」の呼び名はふさわしくないと排除され、替わってスサノオ命が祭神となりました。当神社は疫病除けの神社として創建されたものです。



10 疱瘡神 文久二戌年九月吉日（1862） 氏子中

駒 42 木・豊受神社

* 創建不祥。祭神は豊受比売命（とようけひめのみこと）。江戸時代の石造物がある旧木村の神社。平成23年12月流山市区画整理により現在地に移転。

11 疱瘡神 昭和二年二月吉日（1927） 駒 34 市野谷・天神社

* 現地で調査するも疱瘡神は確認できず。「わがまち・ふるさと発見」でも、「最近確認したところ、疱瘡神塔がお堂から消えていました。」とある。

12 疱瘡神（年代不明） 平方邑 笠付 57 平方・香取神社

* 「わがまち・ふるさと再発見」＝神社裏には疱瘡神塔がひっそりと佇んでいます。疱瘡神塔は、伝染病の痘瘡（天然痘）に罹らないためや、罹った場合の災いを軽くする



ために、神塔を建てお祈りしたもの。今では絶滅したとも言われる天然痘ですが、当時は、ただ願い祈るほかに、避ける道はなかったのでしょうか。それにしても、悪病でさえも神として祀り上げてしまうところは、日本人の信仰の深さであり、生きるための知恵とでも言うのでしょうか。

第2 大杉信仰

「利根川読本」によれば、「あんばさま」の名で、古くから水上交通安全、疫病退散の神として信仰を集め、おもに関東と東北の一部に分布し、茨城県稲敷郡桜川村阿波にある大杉神社が発祥の地とされる。

神社発行の縁起にも神護景雲元年（767）、二荒山（栃木県日光）を開いた勝道上人が旅の途中、このあたりで猛威をふるっていた疫病を退散させるため、巨杉の下で祈念したところ、三輪（大神神社）の神々が大杉に飛び移った。以来、大杉大神は海河守護、悪疫退散の守護神、日々のくらしの守護神として、多くの人々を守ってきたという。祭神は、倭大物主櫛甕玉大神といい、大己貴大神と少彦名大神を配祀神としている。

流山市内でも大杉神社に関連する神社は、名前も同じの「加・大杉神社」を始め、「平和台・大宮神社」、「深井新田・六社神社（舟形神輿）」、「西深井・三社大神」、「平方・香取神社（神面）」、「北小屋・香取神社」、「赤城神社」「前ヶ崎・香取神社」、「名都借・香取神社」、「向小金・香取神社」、「木・香取神社」と、非常に多い。

昨年（2015）の元旦、平方の香取神社にお参りに行くと、普段は大杉神輿庫の扉が閉まっているが、元旦のためか偶然にも扉が開いており、内部を撮影することができた。神輿とその内部にある大杉神社の天狗（神面）である。過日、野田市郷土資料館で見た一連の展示物や資料から、この地域でも大杉信仰があったことが解る。



この天狗の面は、大杉神社では病魔を払う効能を持った神面とされている。「縁起録」には、痘瘡（天然痘、疱瘡）が流行した際に、海尊のもとを訪れた里老に対し、神面を貸し与えて病人の床上に置かせたところ、病がたちどころに快復した、あるいは病魔を村から払った等の効験が数多くあった。ここから、大杉神社を信仰する地域では、天狗の神面を阿波の大杉神社に借りに来る習慣が生れていった。



流山市と縁の深い俳人、小林一茶と大杉神社の関連も深い。まず、大杉神社の正面に小林一茶の句碑「夕立や あんば大杉 大明神」があり、一茶がこの付近をしばしば訪れていることがわかる。また、「赤の民族」や「下総の習俗と迷信」にも、その時の記述が「七番日記」に書かれていると紹介している。「～布佐村に入る。御輿大小二ツかき出して、阿波大杉大明神悪魔を払いてよいよさ、と笛太鼓三弦にてはやして、さらに祭りのさまをなす。此里疫神の流行なる物からかくするといふ。～」ここでいう疫病は疱瘡のことで、当時大変恐れられていた。この祭りは「アンバばやし」といわれるもので、悪魔祓いをするものである。

第3 近隣市の疱瘡神塔

1 「赤の民俗」によれば、利根川・江戸川流域の疱瘡神には、特殊なものがないとはいえないが、その大部分は「疱瘡神」などと彫られた文字塔である。ところが、同じ利根川筋の茨城県取手市だけは、神像を彫った特殊な疱瘡神塔（全体の半分以上）が注目される、とある。いくつか挙げる。

取手市・鷲神社 舟型二神座像 文政6年（1823）

上から注連縄の部分、像刻の部分、銘刻の部分の三部分が刻まれている。上部に注連縄があり、男神は頭巾状の被り物をして幣束を右肩にかける。女神は長髪で手に徳利状のものを持っている。





取手市・鹿島神社 駒形 二神座像 天保3年(1832)
女人講中

* 上部三分の一部分に二神像を刻む。男神は幣束を肩にかついでいる。女神は盃状のものを左手に持っている。下部中央に疱瘡神とあり、その左右に造立年造立者を刻む。

2 印西市の疱瘡搭

印西市には、地名と寺名が同じ名刹が2ヵ所ある。結縁寺(結縁寺)と松虫(松虫寺)であり、どちらも行基の開祖である。また、結縁寺には源頼政の伝承があり、松虫寺には松虫姫の伝承がある。それは聖武天皇の皇女松虫姫が重い病(疱瘡)にかかられたが、不思議な夢のお告げによって下総国に下向され、その地に祀られていた薬師仏に祈ったところ重い病が平癒した。さらに、結縁寺の熊野神社境内に「疱瘡姫皇女」書かれた疱瘡神塔があり、松虫姫神社横には鮮やかな赤い幣束が飾ってある疱瘡神塔がある。そして最後に、松虫姫と皇女は同一であるとされているのである。



「疱瘡姫皇女」



赤の幣束

疱瘡神は赤色が大嫌い。そこで赤く塗った物を神棚に祀れば、疱瘡神は恐れて近寄らないという迷信が江戸時代の庶民にあった。だから、赤い色は魔よけと共に疱瘡(天然痘)除けとして使われた。稲荷神社の赤い鳥居は神域を守るためであり、郷土玩具である赤べこや疫病が嫌いな犬の張り子、七転び八起きのダルマにも赤が使われている。

3 梵字を刻んだ疱瘡神（道祖神・疱瘡神塔）

「赤の民俗」に次のようなものが紹介されている。「松戸市馬橋の王子神社には、富士塚をはじめ、道祖神など、江戸時代庶民が残した多くの石造物がある。富士塚を背にするような格好で、二邪鬼をふまえる青面金剛を彫った庚申塔に並んで、安永4年（1775）、願主秋谷喜兵衛によって造立された石祠型の疱瘡神塔がある。祠内の疱瘡神と刻まれた上部に、オン・キリーク・サク・ウーンの四梵字のある珍しいものである。」



王子神社は、馬橋の古刹萬満寺の守護神として創建される。また境内にある道祖神は、寛文元年（1661）の銘があり、石祠型のものとしては、県内最古、安山岩製、高さは72cmである。

また、田村哲三氏が持つ資料（水戸藩士が書いた『駅路鞭影記』に、「左の方廻りめに万満寺とて禅宗有 不動堂有表ハ仁王門 疱瘡前の子共杯候者ハ此仁王の草履を借りて家内ニかけ置疱瘡快気して1倍ニて返すと云うなり」と、王子神社に隣接する「萬満寺」の仁王門に疱瘡除けの信仰があった、との助言を受けた。

おわりに

市内の疱瘡神塔を中心に確認したが、「疱瘡神」と書かれた文字塔が主流である。ただ、隣接市では前述したように、「所変われば品変わる」ではないが、その地域や場所で信仰や石碑の形態がまちまちである。

次に、日本における天然痘の発生状況を「流山の疱瘡神」に見ると、奈良時代3回、平安20回、鎌倉8回、室町12回、江戸時代15回を記録している。明治以降でも大流行が3～4回あり、中でも18年から20年にかけての3年間には、1万6千人弱が罹患し、3万2千人弱が死んだ。また、25年から28年にかけては8万8千人のうち1万6千人が死んでいる。以後は種痘の徹底から急激に減少したと、年代によってその異常発生ぶりが分かる。

また、市内疱瘡神塔の建立年度（明和四年（1767）～文久二年（1862））と「流山の災害史」を突き合わせると、「疫病と千葉県」の中で、「～特に明治初期は、幕末から続いた天然痘への対策が課題となった。天然痘は古代からたびたび流行しており、千葉県では種痘による対策を進めた。」とあるが、具体的な数字等の内容には触れられていない。

また、直接確認したわけではないので資料に頼るしかないが、「赤の民俗」によれば、「江戸川筋の流山市もハウソウビマチの盛んなところである。『流山市のオビシャ祭り』によると、三輪野山、鱈ヶ崎、木、向井小金新田、名都借ではハウソウビマチ、駒木新田ではハウソウガミサマ、前ヶ崎、後平井ではハウソウオビシャとって疱瘡神を祭っている。それぞれの地域によって特色ある祭り方をしているが、待道（子安）信仰に結びついた女の祭りであること、赤い幣束、サンダワラ型の赤い幣束などが祭りに用いられている点など小林新田

のハウソウビマチと基本的に共通点の多いことが注目される」と、ある。

いずれにしても、大杉神社を中心とした疫病退散の信仰が、舟運によって各地に広がり、流山市内にも伝播してきたものと思われる。

中野 隆志 (2022.5 改)

参考文献

- ・「楽しいいしぶみ事典」(東葛流山研究=第 32 号) 流山市立博物館友の会編
- ・わがまち・ふるさと再発見! 身近な史跡めぐり(編者・田村哲三)
(ASA江戸川台・運河グッドモーニング)
- ・改訂版 ながれやま史跡ガイド(編者・田村哲三)
- ・こんにちは流山(流山市教育委員会)
- ・流山の石仏(流山市立博物館調査研究報告書 5)
- ・野田と大杉様～地域に息づく信仰～ 野田市郷土博物館
- ・赤の民俗～利根川流域の疱瘡神～ 榎本正三著(崙書房)
- ・利根川読本(流山市立博物館友の会編)
- ・一茶下総旅日記(伊藤晃著)
- ・下総の習俗と迷信(伊藤晃著)
- ・石のカルテ(房総の病気を治す石造物=川村純一著)
- ・流山の疱瘡神(一色勝正著)